

ISSN 2436 - 5122

2025年度

徳島大学全学FD推進プログラムの実施報告

徳島大学FD委員会

実施報告

2025 年度徳島大学全学 FD 推進プログラムの実施報告

南川慶二¹⁾・吉田 博²⁾・飯尾 健²⁾・塩川奈々美²⁾¹⁾ 徳島大学教養教育院 ²⁾ 徳島大学高等教育研究センター

要約：徳島大学では、2002 年度から全学 FD 推進プログラムを通じて、FD の体系化、組織化、日常化を推進してきた。2025 年度は、新たに教育活動に携わる学部学生、大学院生を対象とした、SA (Student Assistant), TA (Teaching Assistant), RA (Research Assistant) 研修、より高度な教育活動に携わることができる TF (Teaching Fellow) 研修も全学 FD として実施することとなった。また、教育活動に関する個別相談に対応する「教育開発コンサルティング」も新たに全学 FD に組み込んだ。高知大学と香川大学による協働で FD プログラムの開発・運営を行っている「授業について考えるランチセミナー」では、今年度さらに参加者数が増加し、参加者数が 100 名を超えるテーマもあった。「大学教育カンファレンス in 徳島」は昨年度に引き続き対面会場での実施をメインとし、一部のプログラムをオンラインで配信するハイブリッド型で開催し、多様な参加ニーズに応えることができた。本年度実施した各プログラムの概要を記載し、アンケート結果等から窺える成果と今後の課題について考察する。

(キーワード：教育の質保証，教育力開発コース，授業について考えるランチセミナー，指導補助者研修，教育開発コンサルティング)

2025 Annual Report on Faculty Development Programs at Tokushima University

Keiji MINAGAWA¹⁾ Hiroshi YOSHIDA²⁾ Ken IIO²⁾ Nanami SHIOKAWA²⁾¹⁾ Institute of Liberal Arts and Sciences, Tokushima University²⁾ Research Center for Higher Education, Tokushima University

Abstract: Tokushima University has been promoting the systematization, organization, and routinization of faculty development (FD) through the university-wide FD promotion programs since academic year 2002. In academic year 2025, training programs for undergraduate and graduate students serving as Student Assistants (SAs), Teaching Assistants (TAs), and Research Assistants (RAs), as well as Teaching Fellow (TF) training programs for those engaged in more advanced educational activities, were introduced as part of the university-wide initiative. In addition, an "Educational Development Consulting" service has been newly introduced to provide individual consultations on educational activities. The "Lunch Seminar on Thinking about Classes", which is collaboratively developed and managed in partnership with Kochi University and Kagawa University, saw a further increase in participation this academic year, with some sessions attracting more than 100 participants. Moreover, "the University Education Conference" was held face-to-face, while some of the programs were delivered online, thereby addressing diverse participation needs. This paper provides an overview of each program conducted this year and discussions of future challenges based on the results of the questionnaire are described.

(Keywords: quality assurance in education, Educational Development Course, Lunch Seminar on Thinking about Classes, training for teaching support staff, Educational Development Consulting)

1. はじめに

コロナ禍を一つの契機としたオンライン授業や e ラーニングの普及により、近年の大学教育には大きな変化が起こっている。特に、急速に性能が向上した生成 AI は学生の学び方に多大な影響を

及ぼしている。レポート作成や翻訳、演習問題の解法やプログラミングなど、様々な課題をほとんど瞬時に解決できるため、学生自身が学びを意識して活用すれば自学自習に大きな効果が期待できる。その反面で、安易な使い方をすれば自分自身

で考える機会が減少するという弊害も懸念される。

教育環境の急激な変化に対応するためには、各教員の実践例などの情報を共有し議論する機会が必要であり、FD の重要性はますます高まっている。徳島大学は学内のみならず他大学との連携も含め多様な FD プログラムを推進している。今年度は新しいプログラムも加えてさらに充実した活動で成果を挙げている。

以下、今年度の各 FD の具体的内容とその成果を述べる。 (南川慶二)

2. 教育改革に関する勉強会・意見交換

徳島大学の教育改革を遂行するために、徳島大学教育担当理事と全学 FD 推進プログラムの実施を支援する高等教育研究センター教育基盤開発部門は、大学教育改革の動向及び徳島大学の現状について、意見交換を行い、具体的な教育改革の取り組みについて提案・検討を行っている。本 FD はマクロレベルの FD (教育改革 FD) として位置づけており、教学マネジメントを支える基盤としての役割も期待されている。今年度は、2025 年度に本学が実施した機関別認証評価に関連した「シラバス作成ガイドライン」の改訂、今年度から本格実施となった文部科学省による全国学生調査に関連した「学生の学修に関する実態調査」の設問項目の見直しに関する意見交換を行った (表 1)。

教育改革 FD を通して、教育基盤開発部門では、高等教育開発の専門的立場から、本学が取り組むべき教育改革を支援するとともに、教育の内部質保証を推進している。近年の大学教育においては、教学マネジメントの確立が強く求められており、教学 IR を機能させるための取り組みも必要であり、2025 年 10 月に実施された、高等教育研究センターの改組によって新たに設置された、アドミッション・EM 部門との連携も重要となっている。

引き続き全学 FD 推進プログラムは本学の教育改革、教育の内部質保証に関わる取り組みを通じて、学習者本位の大学教育を実現することに貢献することが期待されている。 (吉田 博)

表 1 教育改革に関する勉強会・意見交換

回	実施日	主な内容
1	5 月 1 日	・学生の学修に関する実態調査 ・大学教育カンファレンス in 徳島
2	8 月 18 日	・授業設計ワークショップ
3	10 月 30 日	・シラバス作成ガイドラインの改訂 ・徳島大学の英語教育や教学 IR 等に関する意見交換

場所：教育担当理事室（本部棟 3 階）等

3. 教育の質保証 FD

3.1 目的・背景

徳島大学では 2018 年度に「徳島大学における教育の内部質保証に関する方針」等が定められ、学部等ごとに「教育プログラム評価委員会」が設置された。各教育プログラム評価委員会では、「プログラム評価・改善実施手順」を定め、教育プログラムの評価・改善を進める上での体制整備が行われた。2020 年 1 月 22 日に中央教育審議会大学分科会より示された「教学マネジメント指針」においても、教育プログラム評価・改善をエビデンスに基づき、実質的に実施していくことが強く求められており、徳島大学でも実態を把握し、全学的な支援及び情報提供、組織間の連携等を進めることが必要であるといえる。2020 年度には、各学部等のプログラム評価委員会を対象に、教育プログラムの評価・改善に関する課題やニーズを把握するための調査を実施した。その結果、プログラム評価の意義や必要性に関する理解を共有すること、技能領域や態度領域も含めて客観的に評価するための具体的な方法とエビデンスを整理することが、多くの学部学科等で必要であることが明らかになった。これらの背景のもと、各学部等の教育プログラムの評価・改善について、客観的な指標に基づいた透明性のある評価、改善の計画を作成することを目的とした教育の質保証 FD を実施している。

3.2 概要

教育の質保証 FD の具体的な内容は、教育基盤開発部門教員と学部等の教育プログラム評価に関わる担当者が、プログラム評価の取り組みを確認

し、当該学部等が目指す取り組みの実現に向けて課題や対応策等を検討するものである。打ち合わせを重ねながら、部門スタッフが必要な情報を提供し、当該学部等の文脈に合わせた実現可能な評価・改善計画を作成している。

2025 年度は、2021 年度より継続的に実施している歯学部において、担当者と打ち合わせを行い、歯学部における FD 実施にむけて提案や助言を行った。

■ 打ち合わせ

2025 年 9 月 19 日 (金)

■ 場所

オンライン (Zoom)

■ 参加者

保坂啓一、日野出大輔

■ 概要

歯学部では 2021 年度から本 FD の取組として、教育プログラムの評価・改善に取り組んでいる。2021 年度は、「カリキュラムアセスメントチェックリスト」、2022 年度は、「マイルストーンルーブリック」を作成し、2023 年度は、これらのツールを使って、関係者と共に実際の評価を行った。2024 年度は、学生視点からの意見を取り入れるために、学生と教員がグループで意見交換を行い、学生は将来を見据えて学習していくための意義や取り組み方を考え、教員は学生のニーズに合わせた、より効果的な教育活動や授業実践の在り方を考えるためのワークショップを実施した。

これまで、4 年間にわたって、教育プログラムの評価・改善に関する取組を行ってきた。2025 年度は、継続して教育プログラムの評価・改善に関わる内容を行うことも検討したが、歯学部 FD 委員との議論を経て、歯学部の教員が徳島大学歯学部の現状や課題について把握し、各教員が今後取組むべき方向性について考える機会とする内容の FD を実施することとした。

2025 年度の FD は、2026 年 1 月 21 日に「歯学部の現状と課題—50 周年の新たなスタートライン—」というテーマで、湯本浩通歯学部長、工藤保誠歯学科長、片岡宏介口腔保健学科長による FD 講演が行われた。参加者は、教員 103 名、事務職員 2 名であった。

3.3 成果と課題

2025 年度は、教育プログラムの評価・改善に直接的につながる取組ではなかったが、歯学部で 100 名を超える教員が参加し、歯学部の教員が、徳島大学歯学部の現状 (国家試験合格率, 論文数, 獲得外部資金, 世界ランキング, 病院稼働, 特許, スタートアップ数, 他大学への教員輩出数など) について知る機会となり、学部長, 学科長の考えや今後の方針について考える機会となった。また、このような機会を継続して設定していこうという声も実際に挙がっているようである。定期的に、教育プログラムレベルでの評価・改善を行うことは重要であるが、学部教員が当該学部の現状を把握したり、教員同士で方向性を共有する機会は重要であると考えられる。2026 年度も引き続き、これまでの教育プログラムの評価・改善の取組や今年度の取組も踏まえて、教員同士、教員と学生が意見交換できる機会を創るとともに、授業や教育プログラムの改善につなげる FD を学部 FD 委員とともに作っていく予定である。(吉田 博)

4. 教育力開発コース

教育力開発コースは、授業設計、授業の実施・改善、教育活動を振り返り、自身の目標を明確にし、改善につなげるといった一連のプロセスを支援するものである。徳島大学においてはこれらの教育活動を重視しており、学外より講師または准教授採用後 1 年以内の教員、及び講師または准教授昇任後 1 年以内の教員を対象に実施している。対象者はまずステップ 1「授業設計ワークショップ」を受講した後、ステップ 2「授業実践の振り返り」または「授業参観・授業研究会」のいずれかを受講することが定められている。加えて受講後 3 年以内に、ステップ 3「ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ」を受講することが望ましいとされている。

4.1 授業設計ワークショップ

4.1.1 目的

授業設計ワークショップは、授業設計とアクティブ・ラーニングの手法について学び、模擬授業・授業検討会を行うことで、実践的に知識やス

キルを修得するものである。本ワークショップの目標は次の 4 つである。

- ① FD 活動の理念，活動計画を理解することができる。
- ② 授業を計画，実施し，評価する方法を体得することができる。
- ③ 授業研究の仕方を理解し，実践することができる。
- ④ FD 参加者同士の仲間づくりができる。

また 2017 年度からは参加者がワークショップの講義部分をビデオ教材で事前に学習してからワークショップに参加する，反転授業形式を導入している。

4.1.2 概要

■開催日程

2025 年 8 月 21 日 (木)・22 日 (金)

■会場

常三島キャンパス フューチャーセンター (地域創生・国際交流会館 5 階)・教養教育 4 号館

■対象者

本ワークショップは四国地区大学教職員能力開発ネットワーク (SPOD) へ開放しており，2019 年度以来，学外の参加者の参加を認めている。今年度は SPOD 加盟校から 1 名が参加した。学内の対象者は今年度に教育力開発コースの受講対象者となった教員，および昨年度までに本ワークショップを修了していない教員，推薦を受けた者 (助教及び，教授等) としている。ただし，病院及びプロジェクト採用等の場合は除いた。また，①学外で同様の研修を受けた場合，②担当する授業がない場合，③診療業務を主に担当している場合，についても参加を免除した。

■参加者

2025 年度の参加者は徳島大学所属の教員 20 名と SPOD 加盟校所属の教員 1 名，合計 21 名である。詳細は以下に示す通りである。

【学内教員】

氏名	所属	職名
榎 将太	総合科学部	准教授
山口 雄治	総合科学部	准教授

越坂 裕太	総合科学部	講師
藤原 秀朗	総合科学部	講師
飯藤 大和	医学部	准教授
柳井 亮二	医学部	准教授
大浦 雅博	医学部	講師
竹内 誠	医学部	講師
森内 洋美	医学部	講師
須磨 紫乃	歯学部	准教授
水頭 英樹	歯学部	講師
佐藤智恵美	薬学部	准教授
宇野 好宣	理工学部	准教授
康 鑫	理工学部	講師
倉科 昌	理工学部	講師
和田 直樹	生物資源産業学部	講師
藤滝 香織	教養教育院	講師
板東 正記	人と地域共創センター	准教授
片山 哲郎	ポストLEDフォトニクス研究所	准教授
長谷 栄治	ポストLEDフォトニクス研究所	講師

【学外教員】

氏名	所属	職名
朝田 正樹	徳島文理大学	准教授

■運営メンバー

運営メンバーは，理事 (教育担当)，FD 委員会委員長，FD 委員会委員を含めた教員 13 名，学務部教育支援課教育支援係職員 3 名の計 16 名であり，詳細は次の通りである。

氏名	所属	職名
河野 文昭		副学長
南川 慶二	教養教育院	副理事
齊藤 隆仁	教養教育院	教授
豊田 哲也	総合科学部	教授
池田 康将	医学部	教授
保坂 啓一	歯学部	教授
立川 正憲	薬学部	教授
北條 昌秀	理工学部	教授
金西 計英	高等教育研究センター	教授
吉田 博	高等教育研究センター	准教授
飯尾 健	高等教育研究センター	助教
塩川奈々美	高等教育研究センター	助教

田巻 公貴	高等教育研究センター	助教
川上ちぐさ	教育支援課教育企画係	係長
川井 荘楽	教育支援課教育企画係	事務補佐員
山崎 一恵	教育支援課教育企画係	事務補佐員

■内容

2 日間にわたり、表 2 の通りプログラムを実施した。

■全体の流れ

[1 日目]

「(1) オリエンテーション」では、大学教育改革の流れや、本学の教育改革について説明を行った。とくに、それぞれの授業を学位プログラム全体の一部として位置付けること、学生を主語とした学習成果に注目すること、適切な教学マネジメントの必要性の観点から、授業設計について気を付けるべき点を紹介した。

続いて、授業設計ワークショップ全体の流れや教育力開発コースの意図や内容を説明し、昨年度の参加者の声を紹介して、参加者の動機づけを行った。

「(2) アイスブレイク」では、参加者同士がお互いについて知ることができるよう、テーマにもとづいた自己紹介を行うというワークを実施した。

「(3) ワーク自身の教育理念」では、教育活動を行う上で、それぞれの教員が大切にしていることを整理しながら、教育理念を意識することの大切さを説明し、「ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ」の紹介ならびに教育理念を整理するためのミニワークを行った。

「(4) ワーク授業設計の基本」では、事前に課題として作成したシラバスおよび授業計画書を参照しながら、授業設計における目的・評価・授業設計における各ポイントをもとに内容の修正・共有を行った。

「(5) 講義・ワーク授業計画」では、シラバスや授業計画書の書き方について説明があり、徳島大学が定める「シラバス作成ガイドライン」が紹介され、目標設定の仕方や、その記述方法が解説された。続いて、これまでの講義やワークを踏まえて、その後、参加者がペアとなりシラバスおよ

び授業計画書の相互チェックを行った。

[2 日目]

「(6) 模擬授業実施 (グループで実施)」では、参加者や運営メンバーがグループごとに各教室に分かれて、参加者全員が模擬授業を実施した。各グループには FD 委員、高等教育研究センターの教員がコンサルタントおよび司会者として入り支援を行った。模擬授業の流れは、はじめに参加者が模擬授業を実施する授業のシラバスと授業計画書を説明し、その中からある一部分の 15 分間を取り上げ、その部分を模擬授業として実施した。グループの参加者は学生役として模擬授業に参加した後、全員で授業検討会を行い、参加者がお互いに良い点、改善点について話し合いながら、授業を良くするための方策などについて議論した。

「(7) 模擬授業の振り返り」では、まず模擬授業に対する全体への総評が行われた。その後、参加者は自身の模擬授業をグループのメンバーからもらった意見をワークシートにまとめ、今後のアクションプランを作成した。作成したアクションプランについては、グループ内で共有を行った。最後に数名の参加者から、研修で学んだことや自身のアクションプランについて紹介してもらい、全体での共有を行った。

「(8) 教育力開発コース概要」では、《授業設計ワークショップ》⇒《授業実践の振り返り》or《授業参観・授業研究会》⇒《ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ》と続く「教育力開発コース」の概要や意義が説明された。

「(9) プログラムのまとめ」では、ワークショップ全体に対する講評があり、終わりの言葉によって締めくくられた。修了証書は参加者に当日授与した。

4.1.3 アンケート結果

ワークショップ終了後に参加者 21 名を対象にアンケートを実施し、参加者全員から回答を得た。図 1 にアンケート結果の一部を示している。また、自由記述の代表的な回答は以下の通りである。

- (1) 参加して良かったと思われる点を、具体的にお書きください。
 - ・自分の授業やシラバスを振り返る機会になった

表 2 授業設計ワークショップ
授業設計ワークショップ日程 (第 1 日目)

日時：2025 年 8 月 21 日 (木)

場所：常三島キャンパス 地域創生国際交流会館 フューチャーセンター

時刻	内 容	講師・担当者	備 考
12:30 - 12:50	・受付 (地域創生国際交流会館フューチャーセンター)		
12:50 - 13:20	(1) オリエンテーション ・はじめに (副学長より挨拶) ・大学教育改革の流れ ・研修のねらいと意義	飯尾 健(進行) 副学長(教育担当) 河野 文昭 FD 委員会委員長 南川 慶二	フューチャー センター
13:20 - 13:50	(2) アイスブレイク「課題・目標設定」 ・参加者自己紹介・交流	塩川奈々美	フューチャー センター
13:50 - 14:00	休憩		
14:00 - 15:00	(3) ワーク「自身の教育理念」 ・授業で大切にしていること ・育成したい学生像 ・実践したい教育	吉田 博	フューチャー センター
15:00 - 15:10	休憩		
15:10 - 16:40	(4) ワーク「授業設計の基本」 ・授業設計の基本方針 ・授業目標に対応する評価 ・評価に対応する学習活動	飯尾 健	フューチャー センター
16:40 - 16:50	休憩		
16:50 - 17:30	(5) 講義・ワーク「授業計画」 ・シラバス・授業計画書の書き方 ・シラバス・授業計画書の修正 ・2 日目の模擬授業の進め方について	塩川奈々美 スタッフ全員	フューチャー センター
17:30 - 18:00	シラバス・授業計画書の修正および スタッフへの質問・個別対応 (任意参加)	スタッフ全員	フューチャー センター

授業設計ワークショップ日程 (第 2 日目)

日時：2025 年 8 月 22 日 (金)

場所：常三島キャンパス 教養教育 4 号館 201 教室他

時刻	内 容	講師・担当者	備 考
12:30 - 13:00	・集合, 模擬授業準備	スタッフ	集合：教養教育 4 号館 4-201 教室
13:00 - 15:30	(6) 模擬授業実施 (グループで実施) ・FD 委員紹介, 流れの確認 【模擬授業の流れ】 (1 人 30 分×4 人 (休憩適宜)) ・シラバス・授業計画書等の紹介 (5 分) ・模擬授業の実施 (15 分) ・授業検討会 (10 分) →チェックリストをもとによかった点, 改善点等を 検討する。	各班司会： FD 委員 ワーク支援： スタッフ全員	< 模擬授業実施手順 > 教室：各班グループ 部屋へ移動
15:30 - 15:45	休憩		
15:45 - 16:45	(7) 模擬授業の振り返り ・模擬授業検討会を受けて授業の改善点 ・今後のアクションプラン	吉田 博	教養教育 4 号館 4-201 教室
16:45 - 17:00	(8) 教育力開発コース概要 ・教育力開発コースの意義・内容	飯尾 健	教養教育 4 号館 4-201 教室
17:00 - 17:15	(9) プログラムのまとめ ・講評 ・修了証書授与 ・アンケート ・おわりの言葉	飯尾 健(進行) 副学長(教育担当) 河野 文昭 FD 委員会副委員長 保坂 啓一	教養教育 4 号館 4-201 教室
18:00 -	情報交換会 (任意参加)		

- ・授業に関する基礎的な知識を得られた
 - ・他学部の教員との交流ができた
 - ・他の教員の授業を見る機会ができた
 - ・授業改善のための相談先を知ることができた
- (2) 研修をよりよいものにするために改善すべき点があれば、具体的にお書きください。
- ・配布資料が多く、簡潔にまとめてほしい
 - ・より実践的な内容を取り上げてほしい
 - ・時間が長すぎた
- (3) その他、お気づきの点があればお書きください。
- ・自分の担当する分野の実態と内容が合わない面があった
 - ・1日目終了後にシラバス・授業計画書修正を課題として提出することを事前に案内してほしい
 - ・時期が他の業務と重複しており負担が高い
 - ・業務の都合上1日だけのプログラムの方が参加しやすい

習得できたこと、模擬授業を通じて他の教員の実践を見たり、自身の授業実践を振り返ることで授業改善の機会となったことが高く評価されていることがうかがえた。以上から、本ワークショップの目標として掲げられている4点について、参加者はおおむね達成できたと考えられる。さらに本ワークショップを通じて、授業改善のためのリソースとして当部門、あるいは当部門が実施している取り組みが認知されたという効果も見られた。

一方で課題としては、ワークの内容および時間配分等を改善し、参加者個人での思考を深める、あるいはグループで対話する機会を十分に確保することが挙げられる。また事前課題や資料の告知・共有にもさらなる改善の余地があると考えられる。

以上の成果と課題を活かし、来年度に向けてより良いワークショップを計画・実施したい。

(飯尾 健)

4.1.4 成果と課題

アンケート結果において、「受講したことによって教育への取り組み方が改善されると思う」の設問において全ての回答者から肯定的な回答が寄せられた。また、ほかの設問においてもほぼ全員から肯定的な回答が得られた。加えて自由記述からも、本ワークショップが授業設計に関する知識を

4.2 授業実践の振り返り

4.2.1 目的

授業実践の振り返りは、日常的な授業における実践を振り返ることで、授業の設計・実施の見直し及び改善までの取り組みを支援するFDである。教育力開発コースの対象者が授業設計ワーク

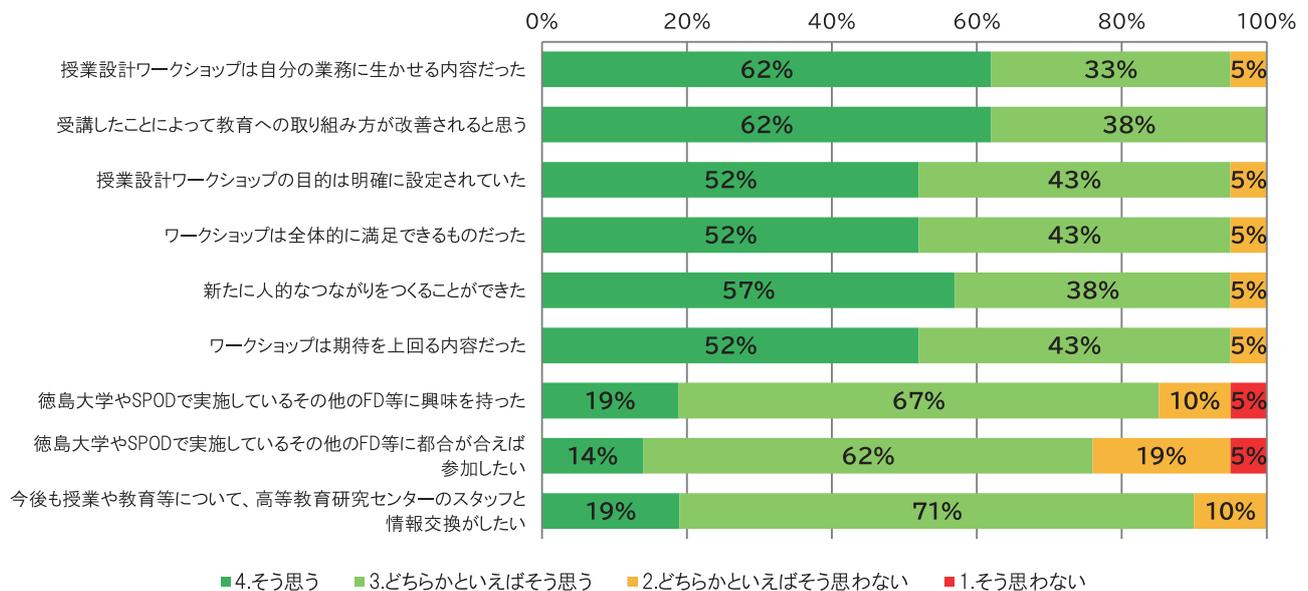


図1 授業設計ワークショップアンケート結果

ショップの次に受講するプログラムであり、ワークショップで修得した内容を実践で活かすための機会となる。

4.2.2 授業実践の振り返りの流れ

「授業実践の振り返り」では、対象者が「授業実践の振り返りシート」に記載されたチェック項目に基づき、自身の授業実践を振り返る。振り返りの流れは次の通りである。まず、対象者が、自身が担当する授業のうち、ある1日(1回)の授業を振り返り実施日として指定し、その授業の「①シラバス」、その日の「②授業計画書」を準備する。このシラバスや授業計画書はFD業務を担う教育改革推進部門の担当者による添削指導を受け、適宜加筆修正を行うことになる。続いて、学生による「③授業評価アンケート」(指定様式)を実施し、アンケート結果を踏まえて、「④授業実践の振り返りシート」(図2)を作成する流れである。

対象者が作成した資料①～④を基に、所属部局のFD委員長が授業におけるPDCAサイクルが構築されているか否かの確認を行う。その後、全学FD委員会において、当該資料の内容について確認し、承認を得る。この承認をもって本プログラムの修了としている。

4.2.3 実施報告

2025年度は18名の教員が実施し(表3)、全員が全学FD委員会において教育力開発コース修了認定に関する承認を受けた。(塩川奈々美)

4.3 授業参観・授業研究会

4.3.1 目的

授業参観・授業研究会は、教員が教員の授業の様子を参観し、授業改善に向けた研究会を行うFDである。教員それぞれの授業内容や状況に寄り添った具体的で日常的なFDを目指しており、授業の把握、授業の改善、参加者間での授業技術の共有を目的としている。

4.3.2 授業参観・授業研究会の流れ

授業参観・授業研究会では、はじめに参加者が対象教員の授業を参観する。授業の様子を撮影・

録画し、学生アンケート(授業の理解度、良かった点、改善して欲しい点、先生へのメッセージを問う)を実施する。この授業参観・授業研究会は学部FDとの共催となるため、全学に案内を出すことで対象教員所属学部内外からの参観者・研究会参加者が集まる場合もある。授業参観にあたっては、高等教育研究センター教育改革推進部門の教員は、授業のポイントや気になる点などを記録する(授業の構成や内容、使用している教材、時間配分、特筆すべき発言や出来事など)。授業参観終了後、授業研究会を開催する(対象教員の都合により別日に実施される場合もある)。ここでは、対象教員と授業を参観した教員が、授業内容について議論を行う。録画したビデオで授業の様子を振り返りつつ、学生アンケートの結果を確認し、うまくいっている点や工夫されている点を共有するとともに、困っている点を解決するためのアイデアについて意見交換を行う。

4.3.3 実施報告

授業参観・授業研究会は教育力開発コースのSTEP2の実施方法の1つであるが、2025年度における開催実績は0件であった。教育力開発コースSTEP2の対象者で、今年度に振り返りに取り組んだ教員は全員が4-2で紹介した「授業実践の振り返り」を希望した形である。

書面で振り返りを行う「授業実践の振り返り」は対象者が自身のタイミングで書類を作成し、提出する形で完了するため、対象者にとって一定の取り組みやすさがある。一方で、授業参観・授業研究会はFD担当者や同じ分野の教員から自身の授業内容や方法について実際に見てもらった上でフィードバックを受けることができるため、そこでの議論が授業改善に結びつけやすいというメリットもある。今後も継続して授業参観・授業研究会の研修制度を運用し、本学教員の授業改善の一助としたい思いがあるが、近年、授業参観・授業研究会の希望者が少ない状況が続いており、運用面での見直しが課題である。(塩川奈々美)

4.4 ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ (TPWS)

4.4.1 背景

徳島大学では 2011 年度より実質的な FD の取り組みを進めるため、「ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ (以下, TPWS)」を開催している。2018 年度～2021 年度は, 参加希望者が 2 名に達しないことや, 新型コロナウイルス感染症への対応からワークショップが実施できていなかった。2022 年度, 2023 年度は TPWS を開催できたが, 2024 年度は再び参加希望者が 2 名に達しなかったことから, 開催できていなかった。今年度は徳島大学から教員 2 名の参加希望があり, 2 年ぶりに TPWS を開催することができた。2011 年度以降, 今年度の参加者を含め累計で 34 名が TPWS に参加している。参加者の満足度は非常に高く, 教育改善に有効的であることが示されている。

4.4.2 概要

■開催日程

2025 年 9 月 3 日 (水) ～ 9 月 5 日 (金)

■会場

教養教育 6 号館 2 階 201 講義室ほか

■参加者

氏名	所属	職名
森口 菜梨 亜	高等教育研究センター	助教
飯尾 健	高等教育研究センター	助教

■運営メンバーおよびメンター

氏名	所属	職名
南川 慶二	教養教育院	副理事
吉田 博**	高等教育研究センター	准教授
塩川 奈々美*	高等教育研究センター	助教
川上 ちぐさ	学務部教育支援課	係長
川井 壮楽	学務部教育支援課	事務補佐員

**はスーパーバイザー, *はメンター担当教員

■内容

3 日間にわたって表 4 のプログラムを実施した。TPWS の様子は図 3 の通りである。

4.4.3 成果と課題

TPWS 参加者のうち 1 名は, 2 年前に TP を作成しており, この間に新規開発した授業に関する成果等を加筆する目的で参加し, もう 1 名は, 将来的に TPWS のメンターを担当することになる高等教育研究センターの教員であったことから, 今年度の TPWS の参加者は, TP についてある程度の知識を持っていた。また, 2018 年度の TPWS 以来となるメンター 2 名体制で TPWS を実施することができ, 参加者にとってより充実した TPWS を開催することができた。また, 1 日目の午後に実施する「ティーチング・ポートフォリオ・チャート (以下, TP チャート)」の作成の際に, TP チャートのみを作成する教員を対象としたワークショップ「TP チャート作成ワークショップ」を同時開催し, TP チャート作成時には, 高知県立大学の教員 1 名が加わった。

TPWS 終了直後に実施した参加者アンケートでは, TPWS の満足度, TP 作成の成果, 運営スタッフに関するすべての設問で肯定的な回答が得られた。また, 自由記述では, 「前回の自分自身の考え軸がブレていないことが再確認できた。目標に何を書いていたか忘れていたけど日々の活動の中で実践できていたことが分かり, TP 作成が大変役に立っていることが分かった。」「アドバイスいただいていた感じがまとめられたと思います。」との意見があり, 例年の TPWS と同様に TP 作成に関する意義があったことが窺える。一方で, 「夜の交流会やりたかったです。」との意見も挙げられていた。今回は参加者の属性を踏まえ, 事前に参加者と協議した結果, 夜の交流会を行わないこととしていた。しかし, これまでの TPWS でも, 多くの参加者が「参加者同士の情報交換や交流が有意義であった」と述べていることから, 交流会も実施した方が, より深い情報交換を実施することができたと考える。本 WS が質保証の観点から参考にしてしている「TP 作成ワークショップ基準」¹⁾ (大学評価・学位授与機構 2014) では, 「交流会の設置」の必要性も記載されていることから, 今後はできる限り交流会も実施するようになりたい。また, 「TP チャート作成ワークショップ」の参加者アンケートにおいても, 1 名の参加であったが

表 4 ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ
第 1 日 (2025 年 9 月 3 日・水曜日)

時刻	内 容	備 考
11:30-12:00	受付	
12:00-12:30	オリエンテーション ・はじめに (全学 FD 委員会委員長よりあいさつ) ・自己紹介 (スタッフ・参加者) ・ティーチング・ポートフォリオとは	201 講義室
12:30-13:30	アイスブレイク 昼食 ・初校へ向けての共通アドバイス ・メンター, 参加者との交流	201 講義室
13:30-15:00	ティーチング・ポートフォリオ・チャートの作成	201 講義室
15:00-16:00	第 1 回 個人ミーティング 各自メンタリングルームへ移動	ミーティングルーム
16:00-17:00	TP 作成作業	201 講義室

第 2 日 (2025 年 9 月 4 日・木曜日)

時刻	内 容	備 考
9:00-10:00	TP 作成作業	201 講義室
10:00-11:00	第 2 回 個人ミーティング 各自メンタリングルームへ移動	ミーティングルーム
11:00-12:00	TP 作成作業	201 講義室
12:00-13:00	意見交換 昼食 ・第 1 稿に共通するコメントと情報共有 ・第 2 稿をまとめるにあたって	201 講義室
13:00-14:00	第 3 回 個人ミーティング 各自メンタリングルームへ移動	ミーティングルーム
14:00-17:00	TP 作成作業	201 講義室

第 3 日 (2025 年 9 月 5 日・金曜日)

時刻	内 容	備 考
9:00-10:00	TP 作成作業	201 講義室
10:00-10:30	第 4 回 個人ミーティング 各自メンタリングルームへ移動	ミーティングルーム
11:00-12:00	TP 作成作業	201 講義室
12:00-13:00	意見交換 昼食 ・第 3 稿をまとめるにあたって ・TP 披露の形式説明 ・TP の活用方法 (ワーク)	201 講義室
13:00-14:00	TP 作成作業 ・プレゼンテーションの準備 (A4 版・一枚程度)	201 講義室
14:00-15:00	プレゼンテーション準備	201 講義室
15:00-16:00	TP 披露・修了式 ・メンティーによるプレゼンテーション ・修了証授与 (全学 FD 委員会委員長より) ・記念写真 ・ワークショップを振り返って	201 講義室



図 3 TPWS の様子

「機会があれば TP を作成したい」と回答していることから、「TP チャート作成ワークショップ」を同時に開催することも意義があると言える。

(吉田 博)

5. 授業について考えるランチセミナー

5.1 目的

「授業について考えるランチセミナー」は、授業改善に関する幅広いトピックや情報を共有するために、教職員および学生を対象に様々なテーマでマイクロレベルの FD プログラムを計画的に実施するものである。また、四国地区大学教職員能力開発ネットワーク (SPOD) の FD プログラムとして、四国地区の各大学にも開放している。

本セミナーの位置づけとして、「気軽に参加でき、かつ充実した情報を提供する」というものがある。すなわち、他の業務や研究を行いながら気軽に参加することができるとともに、教員による実践事例や学生の声を紹介するといった、授業改善に役立てられる有益な情報を提供・共有できることを目指したものである。この位置づけのもとに、今年度も引き続き、月 2 回、昼休みの 12 時 5 分から 50 分まで、同じテーマで週ごとに異なる内容のセミナーを Zoom によるオンラインで実施した (図 4)。今年度も昨年度に引き続き、高知大学学び創造センターおよび香川大学大学教育基盤センターの 3 大学による共催という形となった。本セミナーの企画・実施は本センターの教員が実施するとともに、広報も 3 大学ならびに SPOD を通じて、四国地区の幅広い大学に広く周知を行った。

5.2 概要

表 5 に示した通り、10 のテーマで計 20 回のセミナーをオンラインで実施し、延べ 1,520 名の教職員、大学院生、学部学生が参加した。

5.3 成果と課題

プログラム終了直後、参加者を対象にアンケートを実施し、延べ 496 名から回答を得た。アンケートの設問のうちプログラムの成果に関する 4 件法のアンケート結果は図 5 の通りである。

アンケートの結果から、「今後の授業や教育活動に活かせる情報を得ることができた」、「本セミナーは今後の教育活動において有益なものであった」をはじめ、いずれの設問でも「とても当てはまる」と「どちらかと言えば当てはまる」を合わせた肯定的な回答について 80% を超える回答率を得ることができた。

同時に自由記述では、アンケート内の本セミナーに参加して良かった点・有益であった点として「基礎的な知識を得られた」「具体的な事例や授業の参考になる工夫を知ることができた」「これまでの自分の授業を振り返る機会になった」といった感想が寄せられた。これらの反応は、本セミナーの「気軽に参加でき、かつ充実した情報を提供する」というコンセプトが参加者に受け入れられていることを示していると言える。

また本セミナーは SPOD 開放プログラムであり、徳島大学のほか高知大学・香川大学、さらには SPOD 加盟校から多数の教員が参加した。今年度は延べ参加者のうち徳島大学からの参加者はおよそ 4 割、また高知大学からの参加者は 2 割、香川大学からの参加者は 1 割で、他の SPOD 加

表 5 「授業について考えるランチセミナー」実施状況

	テーマ	コーディネーター	実施日	参加者数
1	合理的配慮が必要な学生への支援	飯尾 健 (徳島大学高等教育研究センター)	4月10日	80名
			4月17日	79名
2	自己調整学習の視点から オンデマンド型授業を考える	杉田 郁代 (高知大学学び創造センター)	5月8日	84名
			5月15日	77名
3	授業時間外学習を促す授業設計	塩川奈々美 (徳島大学高等教育研究センター)	6月12日	83名
			6月19日	84名
4	学習評価の原則と方法	飯尾 健 (徳島大学高等教育研究センター)	7月10日	67名
			7月17日	62名
5	通信制大学の学びから対面授業の 意義を考える	寺田 悠希 (高知大学学び創造センター)	9月11日	49名
			9月18日	49名
6	学生の学習への動機づけを高める 授業づくり	吉田 博 (徳島大学高等教育研究センター)	10月9日	82名
			10月16日	79名
7	学生の能動的な学びを促す チーム基盤型学習 TBL	高畑 貴志 (高知大学学び創造センター)	11月13日	84名
			11月20日	56名
8	授業への AI の活用	吉田 博 (徳島大学高等教育研究センター)	12月11日	115名
			12月18日	104名
9	学生が自ら考え主体的に 学習するための授業づくり	蝶 慎一 (香川大学大学教育基盤センター)	1月8日	90名
			1月15日	82名
10	社会人大学院生の学びと支援	蝶 慎一 (香川大学大学教育基盤センター)	2月12日	59名
			2月19日	55名



図 4 「授業について考えるランチセミナー」実施風景

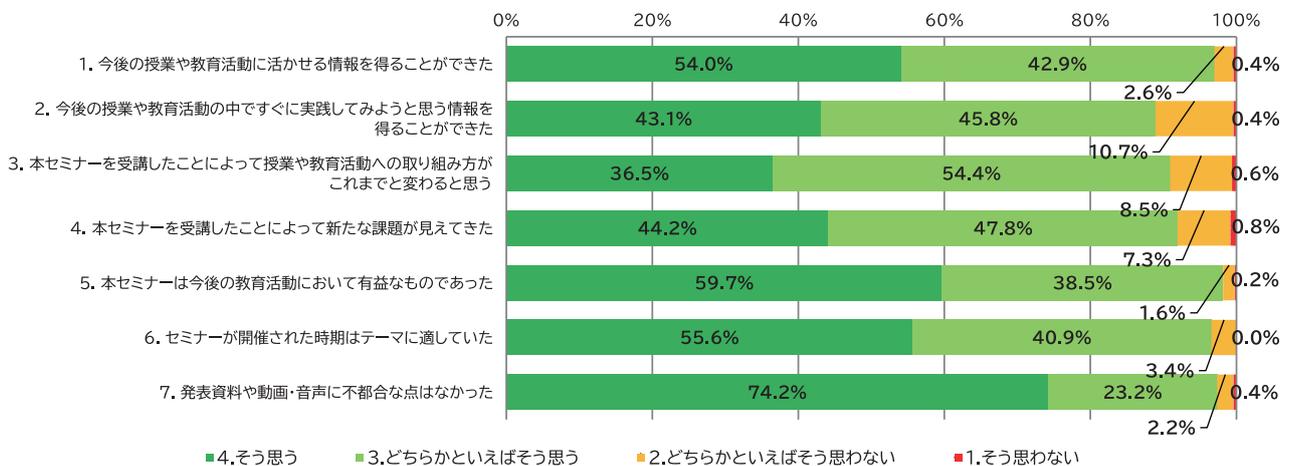


図 5 「授業について考えるランチセミナー」アンケート結果

盟校からの参加者は 3 割であった。

来年度はさらに有益なセミナーが実施できるよう、参加者の関心に即した情報や実践事例を積極的に収集し、効果的に提供できるよう計画を進める予定である。(飯尾 健)

6. 教育活動に携わる指導補助者研修及びプレ FD

6.1 目的・背景

2019 年より大学設置基準改正に伴い、博士（後期）課程の学生に対するプレ FD の実施又は情報提供が努力義務となった。加えて、2022 年の大学院設置基準改正では指導補助者が授業の一部が担当できるとともに指導補助者に必要な研修を行うことが義務化された。これらの流れを受け、徳島大学では指導補助者を TF (Teaching Fellow) として制度化すると同時に、教育基盤開発部門が必要な研修を実施することとした。

また、2025 年度から、これまでは研究科ごとに定めていた TA (Teaching Assistant), RA (Research Assistant) 制度に加えて、学部学生を対象とした SA (Student Assistant) 制度を含め、全学的に統一した実施要項を定めるとともに、統一した研修を実施することとなった。

以上から、教育基盤開発部門では全学 FD 推進プログラムとして 2020 年度から実施している大学で教育に携わる博士（後期）課程の大学院生を対象にプレ FD プログラム「大学院生のための社会で役立つ教育・指導スキル育成講座」に加えて、2025 年度からは TF 活動を希望する大学院生に対する研修プログラム「徳島大学 TF 研修」、TA, RA, SA に関する研修プログラムを実施した。なお、2025 年度は、プレ FD プログラム「大学院生のための社会で役立つ教育・指導スキル育成講座」の参加希望者がいなかったため実施していない。

6.2 概要

6.2.1 徳島大学 TF 研修

■開催日程

2025 年 8 月 1 日 (金)

■会場

蔵本キャンパス医学臨床 A 棟医学部第三会議室

■参加者

学生 1 名

■内容

TF 研修は事前課題と当日の模擬授業から構成されている。まず参加者には事前に TF として業務に必要な基本的知識を習得するための動画教材を送付すると同時に、教材の受講確認と当日実施する模擬授業のためのシラバス・授業計画書を提出するよう求めた。

当日は参加者が授業補助者として参画する予定の授業について模擬授業を行い、その後担当者を交えて授業検討会を実施した。その際、同時に授業補助者として参画する予定の授業の概要や TF として期待されている業務内容、TF 業務への期待と不安等について、TF に関する情報収集およびアドバイスを兼ねた意見交換を行った。

6.2.2 徳島大学 SA・TA・RA 研修

■実施方法

オンデマンドによる研修（約 28 分）を受講し、確認テストへの回答をもって受講したとみなす。各学部・研究科より、当該学生に対して研修サイトを随時案内し、受講の有無を確認する。

■対象者

TA, RA, SA を希望するすべての学部学生、大学院生

■内容

- ①徳島大学の教育理念、TA, RA 制度
 - ②TA の役割・業務・心得
 - ③RA の役割・業務
 - ④ハラスメント防止・合理的配慮 (TA/RA 共通)
- なお、SA は基本的には TA と同様の業務を担うため（一部補助業務に限定）、SA も同様の研修を受講することとしている。

6.3 成果と今後の課題

今年度における TF 研修は、徳島大学において TF が制度化されて以降初めての実施であった。そのため、まず内容自体はこれまでの新任教員研修と同様にシラバスおよび授業計画書の作成と模擬授業の実施という形をとった。しかしながら、TF が実際の授業にどのように参画するかは情報

が少ない面もあり、今回の形式が必ずしも TF の実態と照らし合わせて最適であるとは言えない可能性も考えられる。そのため、来年度以降は TF の実態について情報収集し、研修内容の検討を進める予定である。

また徳島大学では、2020 年度から徳島大学全学 FD 推進プログラムとしてプレ FD プログラムを実施しているほか、今年度からは学部学生および大学院生を対象とした TA、SA への研修活動も担っている。これらの学生向けの研修活動については他の研修プログラムとはニーズが異なる点も多い。加えて徳島大学では、博士後期課程の大学院生が修了後に大学等の高等教育機関で教員となるケースが少なく、他の研究大学が実施しているプレ FD プログラムや TA・SA 研修をそのまま活用することが難しい場合も考えられる。

以上をふまえれば、来年度以降は TA・SA・TF 研修全体について徳島大学における活動の実態把握やこれらの業務を希望・従事する学生のニーズを収集し、体系的な研修活動を検討・計画していく必要があると言える。(飯尾 健)

7. 教育開発コンサルティング

7.1 目的・背景

教育開発コンサルティングは、教育開発基盤部門の教員が、希望する徳島大学の教職員に対して、教育活動に関する情報や支援を、個別に提供する取組である。新しい取組を始めたり、授業を改善したり、学部や学科全体に関わる取組を企画・実施する際に必要な情報について、コンサルティング的な支援を行うことで、教育の改善や新たな取組の推進を図り、徳島大学全体の教育力の向上に資することを目的としている。本サービスは、今年度より全学 FD 推進プログラムの一つとして位置づけられたが、実際にはこれまでも、さまざまな形で個別支援を行ってきた実績がある。今回、全学 FD の一環として正式に組み込み、専用の窓口を設置したことにより、これまで以上に多くの教職員が利用しやすい体制が整った。

7.2 概要

教育開発コンサルティングを希望する教職員

は、専用の申込フォームから、必要な支援を依頼することができる^{註1}。また、教育基盤開発部門の教員に、直接、電話やメールで依頼することもできる。依頼があった内容は、教育基盤開発部門教員、学務部教育支援課教育企画係職員の間で共有することはあるが、それ以外に口外したり他の目的で使用することはない。想定される依頼内容や主な対象者として、次のようなものが考えられる。依頼対象者を () で示している。

- 授業の計画や改善に関する相談 (教員)
- 教育活動や教材開発等の成果報告の仕方に関する相談 (教員)
- ICT や AI の活用、ルールに関する相談 (教員・教務委員・事務職員)
- 教育プログラム等の評価・改善に関する相談 (教務委員・教育プログラム評価委員)
- 学部やコース・専攻における FD の企画・実施に関する相談 (FD 委員・学務系職員)
- SIH 道場の再設計や運営に関する相談 (SIH 道場の担当者・設計責任者)

7.3 実績と今後の展望

2025 年度の「教育開発コンサルティング」の実績は、合計 17 件であった (表 6)。これまで、個別相談を一覧として整理することは行ってこなかったが、今回このように整理したことで、教育基盤開発部門が、授業、FD、教育プログラムなど、幅広い教育相談に対応している状況が明確になった。また、支援の形態や関与の度合いも多様であり、複数回の打ち合わせを行うものや、継続的に授業に参画する支援がある一方で、簡単な問い合わせへの対応にとどまるものも見られる。さらに、今年度設置した専用フォームを通じた問い合わせもあり、本取組が教育相談窓口としての役割を果たしていることが確認できた。

今後は、「教育開発コンサルティング」の取組を学内に周知し、より多くの教職員に活用してもらえよう、広報を進めていくことが求められる。あわせて、支援を受けた教職員へのヒアリング等を実施し、本プログラムの効果や課題について検証を行っていく必要がある。(吉田 博)

表 6 2025 年度教育開発コンサルティングの実績

No	支援形態	支援領域	支援の概要
1	教育プログラム・授業開発に関するコンサルティング	教育プログラム開発	SIH 道場の一部プログラムに関する企画, ワークショップの実施についての支援
2		授業開発・支援	授業改善・開発のためのコンサルティングとして, 授業計画, 評価やその基準, 授業の進め方などに関する相談, 毎授業への参加
3	FD・授業の企画相談, 講師や担当依頼	授業開発・支援	授業におけるグループディスカッションの支援や話題提供の実施 (学期全体で 7 回)
4		授業開発・支援	特定の授業群に関する学生対象ガイダンスの実施
5		FD 開発・支援	学部 FD の企画相談・講師担当
6		FD 開発・支援	TA/RA を対象とした研修会の一部プログラムの担当
7		授業開発・支援	動画教材の作成に関する相談
8		授業開発・支援	manaba の機能に関する相談
9		授業開発・支援	授業における小テストの実施に関する相談
10		授業開発・支援	実習における学生との関り・発問に関する相談
11		授業開発・支援	授業を欠席しがちな履修学生への対応に関する相談
12	教育相談・問い合わせ	授業開発・支援	授業の開発・実践研究に関する相談①
13		授業開発・支援	授業の開発・実践研究に関する相談②
14		授業開発・支援	授業の開発・実践研究に関する相談③
15		授業開発・支援	大学教育カンファレンス in 徳島における研究発表計画に関する相談
16		FD 開発・支援	学部 FD の設計に関する相談
17		FD 開発・支援	部局主催 FD についての全学 FD 認定, 設計に関する相談

8. 大学教育カンファレンス in 徳島

8.1 目的

大学教育カンファレンス in 徳島は, 教育活動の成果を検証し, 教育実践研究を充実・発展させる機会となるよう, 本学や他の高等教育機関で行われている教育実践の先駆的な取り組みを共有し, 大学教育の質的向上に向けた努力の成果を確認することを目的としている。2005 年度から実施しており, 今回で 21 回目を迎える。また SPOD 共通事業として位置付けており, 2020 年度～2022 年度の 3 年間は, 新型コロナウイルス感染症の影響を受け, Zoom によるオンラインをメインとして実施してきた (2022 年度は一部に対面会場を設置)。2023 年度からは徳島大学常三

島キャンパスの対面会場での開催をメインとし, 一部のプログラムをオンラインで配信するハイブリッド形式で実施している。

8.2 概要

■開催日時

2025 年 12 月 26 日 (金) 9:00-17:50

■会場

常三島キャンパス 教養教育 4 号館
一部のプログラムでオンライン (Zoom) 配信

■概要

全体の参加者数は学外からの参加者 55 名を含む, 138 名であった。研究発表の件数は, 口頭発表 16 件, ポスター発表 13 件, ワークショップが

1 件であり、特別講演が 1 件行われた (表 7)。

2025 年度も昨年度に引き続き、対面会場での実施をメインとし、口頭発表、特別講演、ディスカッションについては、オンライン配信を行うハイブリッド型で実施した。オンラインについては、1 つのアカウント内に Zoom のブレイクアウトルーム機能を活用して、発表会場ごとにルームを設置し、参加者は自由にルーム間を移動できるように設定した。参加者 138 名のうち、39 名がオンラインでの参加であった。オンライン配信の運営については、3 年目を迎え、これまでに蓄積されてきた運営に関するノウハウをもとに、想定される対応事項を担当者間で共有し、動作確認を行い、ハイブリッド形式でのカンファレンスの運営に備えた。

特別講演では、京都大学大学院教育学研究科の佐藤万知氏による「SA・TA と共に授業経験を作るとは」と題した講演が行われた。特別講演後には、指定討論者として愛媛大学教育・学生支援機構の上月翔太氏より、「授業全体を「実践共同体」と捉え得るのではないか」という質問や、「シラバス作成など授業設計に指導補助者が入る重要性」などのコメントが提示された。さらに徳島大学 FD 委員会委員長の南川慶二教授も加わり、会場からの質問に回答するディスカッションを展開した。参加者は匿名で質問を投稿することができる Learn Wiz one を活用し、対面会場及びオンラインから 11 件もの質問が寄せられた。ディスカッションでは、SA や TA との関わり方や今後の徳島大学における指導補助者制度の在り方について意見交換が行われた。

8.3 カンファレンスの成果と今後の課題

2025 年度も昨年度と同様に、すべてのプログラムを対面会場で実施し、特別講演、口頭発表、一部のワークショップをオンライン配信したことで、対面会場の参加者数が 99 名であり、またオンラインによる参加者も全国から幅広くあり、学内外からアクセスしやすいカンファレンスになったと考える。発表件数については、例年並みの 30 件であった。しかし、学内の参加者数が過去 12 年間の中では最低であり、コロナ禍を経て、

対面で実施するようになって以降の直近 3 年間をみても、過去と比較して減少傾向にあると感じる。学内の教職員に対する広報を工夫していくことや、発表してもらえるように発表形式や支援の在り方を検討していく必要がある。

カンファレンスでは、参加者を対象にカンファレンス終了後にアンケートを実施しており、70 名から回答を得た (回収率 51%)。カンファレンスの成果に関するアンケート結果を図 6, 7 に示している。「a. 自分に必要な知識やスキルを身につけることができた」、「b. 参加したことによって業務の取り組み方が改善されると思う」という設問について、「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」と回答をした参加者が 80%以上である。「c. 研究発表や各プログラムの内容を十分に理解できた」という設問については 90%以上であり、過去 3 年間に引き続き肯定的な回答を得ている。これは研究発表の内容や特別講演のテーマ設定が参加者のニーズや興味に合致していること、研究発表者の研究が興味深く、発表が工夫されていたことなどが要因の一つにあると考える。今後も、多彩で魅力的な研究発表の投稿につなげていくためにも、引き続きカンファレンスのプレゼンスを高める努力をしていくことが必要である。「d. 他の参加者との交流を深めることができた」については、過去 3 年間の中では最も高く、肯定的な回答が 60%を超えた。対面参加者に限ってみると約 83%が肯定的な回答をしており、3 年間の結果を見る限りでは改善されているようにも感じる。

図 6「有益であったプログラムをすべて選択してください (複数選択)」では、すべてのプログラムで選択率が 70%以上であることから、参加者にとって有益な内容を提供できていたと推察できる。「e. 特別講演の内容は興味深かった」という設問においても、未回答の参加者を除くと (未回答の参加者は特別講演に参加していないとみなす)、全員が肯定的な回答をしており、テーマ設定や内容、講師が魅力的であったことが窺える。自由記述では「TA SA は講義を通して育てることを目標にしない方がいい、良い授業をすることこそが重要でその過程で育っていくことがよいのではないか、という示唆をいただけた」との意見

があり、今後の指導補助者研修や制度について参考となる示唆が与えられたことが分かる。「f. カンファレンスは全体的に満足できるものだった」については、「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」と回答した参加者が 90%を超えており、多くの参加者にとって満足できるカンファレンスであったものと推察できる。

最後に、自由記述を見てみると、参加して良かったと思われる点として、新しい発見があった、新たな視点を得ることができた、新鮮であったという意見が多く得られた。次いで、参加者同士のコミュニケーションや情報発信ができた、コメントをいただけるといった意見が多く挙げられた。本カンファレンスは、「専門分野」における学会や研究会とは違い、「教育」という共通点のもとに、大学を超えて、立場の違う教職員や学生が集い、さまざまなタイプの教育実践等の発表が行われるという特徴がある。これによって、参加者は、普段は見聞きすることがない情報や実践、視点などに触れることができ、新しい知見を得ることにつながったと考えられる。また、発表者と参加者との距離も近く、意見交換がお互いにしやすい雰囲気であったことも窺える。主催者は、本カンファレンスを「アットホームな研究会」と表現して広報活動を行っている。参加することはもちろんのこと、発表を行うことで得られる価値を感じている参加者も少なからずいることが分かる。

一方で、課題として、参加者の少なさ、広報の課題が指摘されている。主催者としても、その点は十分に認識しており、次年度に向けて、新たな取組を取り入れていくなど、具体的な改善策を出していきたいと思う。テーマのニーズについては、生成 AI に関するものがいくつか挙げられている。生成 AI は、近年急速に技術が進展しており、教育においても重要な課題であると考えられる。次年度の特別講演のテーマとして有力候補になると考える。その他、参加者全員への名札(ネームホルダー)の提供、資料の事前配付や送付などの意見もある。開催時期については、よく挙げられる意見であるが、SPOD フォーラムとの兼ね合い、授業、学会シーズンなども踏まえると、なかなか調整が難しい課題である。今回挙げられた意見を踏まえて、

次年度以降のカンファレンスの運営につなげていきたい。
(吉田 博)

注

注 1 教育開発コンサルティングの概要説明や申込フォームは、以下のホームページで公開している。

<https://www.tokushima-u.ac.jp/highedu/reform/fd/docs/61547.html> (2026 年 1 月 29 日閲覧)

参考文献

- 1) 大学評価・学位授与機構 (2014) 「TP 作成ワークショップ基準」
https://www.niad.ac.jp/n_shuppan/project/_icsFiles/afieldfile/2014/07/07/no9_20140707TP.pdf (2026 年 1 月 19 日閲覧)

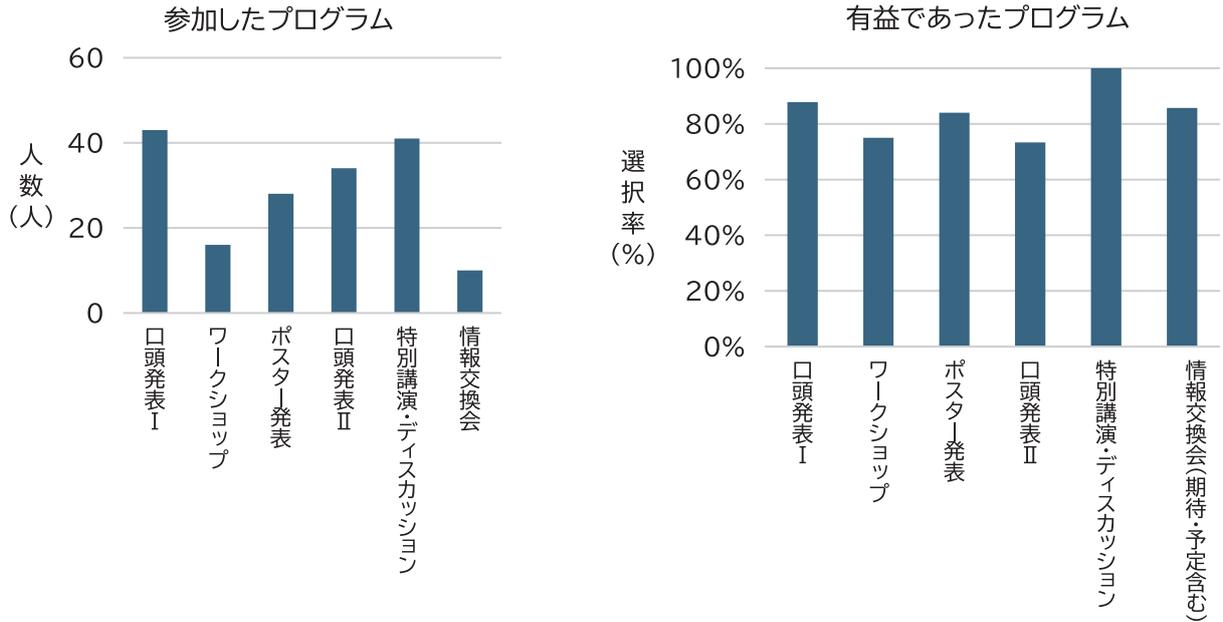


図 6 大学教育カンファレンスで参加したプログラムについて

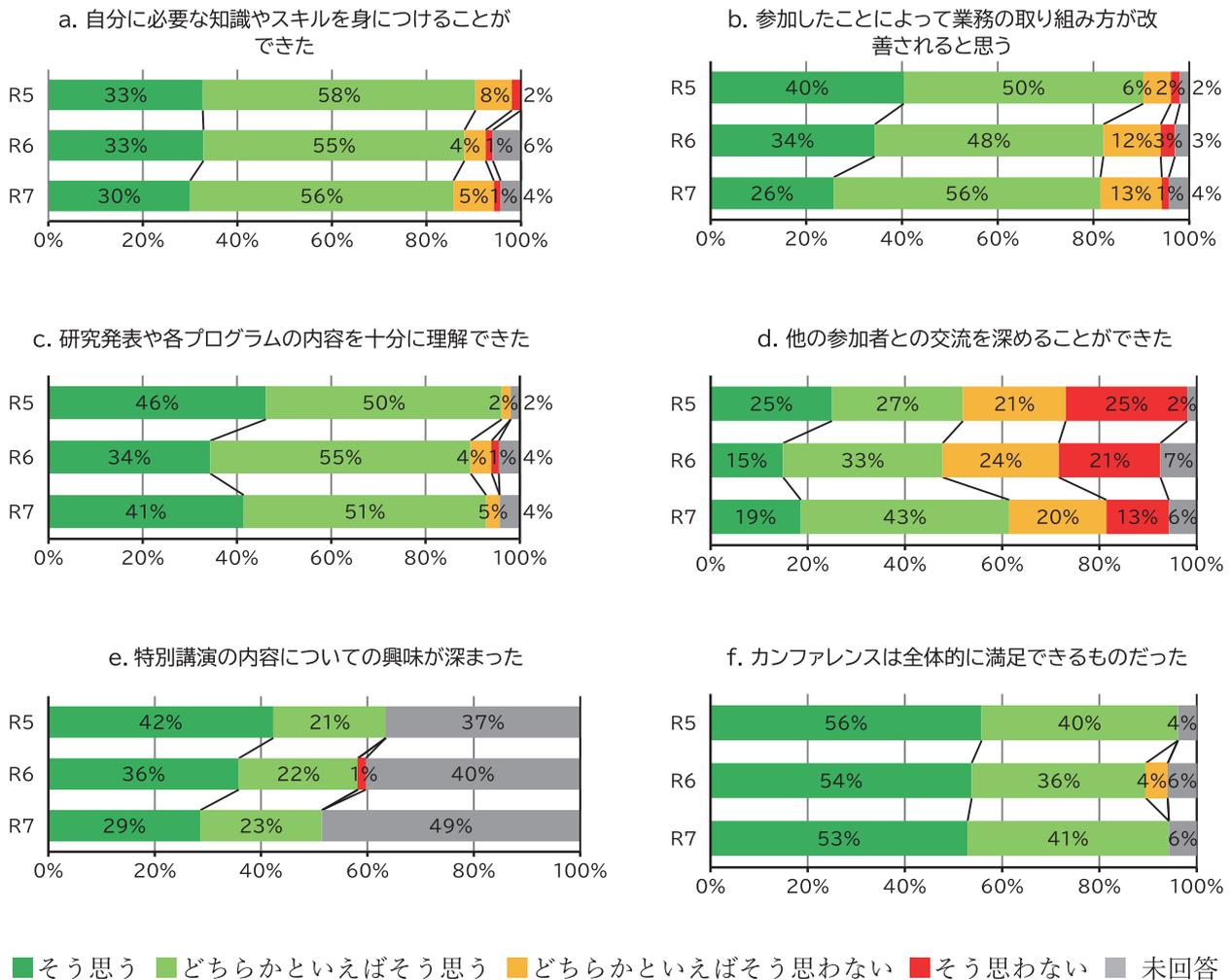


図 7 大学教育カンファレンスで参加したプログラムについて

表 7 第 21 回大学教育カンファレンス in 徳島プログラム

9:00 ~ 9:10	開会挨拶：河村 保彦 学長		
9:15 ~ 10:15	研究発表 I (口頭発表)		
	口頭発表 A < 4 - 202 講義室 > A① 9:15 ~ 9:35 ■四国地区国立大学連合アドミ ッションセンターの取り組み その1 徳島大学 高等教育研究センター 植野 美彦 他	口頭発表 B < 4 - 203 講義室 > B① 9:15 ~ 9:35 ■曖昧な感覚を言語化するキャ リア教育の開発 徳島大学 高等教育研究センター 畠 一樹 他	口頭発表 C < 4 - 204 講義室 > C① 9:15 ~ 9:35 ■ロボコンプロジェクトにおけ る技術継承の取り組みと成果 徳島大学 理工学部 2 年 篠崎 宏介 他
	A② 9:35 ~ 9:55 ■高等教育情報メーリングリス ト「Edutoku」の総括 徳島大学 高等教育研究センター 吉田 博 他	B② 9:35 ~ 9:55 ■ベトナムにおける日本語学習 支援プラットフォーム開発の ための調査計画 徳島大学 高等教育研究センター Tran Hoang Nam 他	C② 9:35 ~ 9:55 ■学習支援サークル「学びサ ポート企画部」の意義 徳島大学 理工学部 2 年 松尾 優輝 他
A③ 9:55 ~ 10:15 ■医学教育における LMS の利用 状況と学修時間の推移 徳島大学 大学院医歯薬学研究部 西田 憲生 他	B③ 9:55 ~ 10:15 ■短期プログラムを通じたキャ ンパスの国際化への方策 (オンライン発表) 高知大学 グローバル教育支援センター 大塚 薫	C③ 9:55 ~ 10:15 ■短期プログラムを通じたキャ ンパスの国際化への方策 (オンライン発表) 高知大学 グローバル教育支援センター 大塚 薫	
10:30 ~ 12:00	ワークショップ < 4 - 202 講義室 > 生成 AI でつくる授業改善パートナー Bot 開発！ 徳島大学 高等教育研究センター 田巻 公貴 他		
13:00 ~ 14:00	ポスター発表 < 4 - 302 講義室 > P① 国際協働型プロジェクトにおける大学生の学びとリーダーシップ形成 愛媛大学 教育・学生支援機構 村田 晋也 他 P② 日本の大学におけるアカデミック・アドバイジングに関する評価の現状と課題 東京科学大学 戦略本部 松本 清 他 P③ ロールプレイング研修が NICE プログラム SA に与える効果 新潟大学 経済科学部 3 年 畑野 美紀 他 P④ 新潟大学 NICE プログラム SA のピアサポートにおけるアドバイス分析 新潟大学 法学部 3 年 長澤 広瀬 他 P⑤ IoT 教材を活用した遠隔ハンズオン授業の実践 徳島大学 技術支援部 辻 明典 P⑥ コロナ禍前・コロナ禍・コロナ禍後におけるセクシュアルハラスメント相談の変化 徳島大学 キャンパスライフ健康支援センター 井ノ崎 敦子 他 P⑦ 実践型インターンシップにおける教員と学生サポーターの効果的な役割分担の考察 徳島大学 人と地域共創センター 川崎 修良 他 P⑧ ティーチング・ポートフォリオの実践とその効果 徳島大学 高等教育研究センター 森口 茉莉亜 P⑨ 教員アンケートの自由記述にみる教員の課題意識 徳島大学 高等教育研究センター 塩川 奈々美 P⑩ 徳島大学生の文章執筆における困難についての検討 徳島大学 高等教育研究センター 飯尾 健 他 P⑪ ゼロから創る技術とチームーエコランプロジェクト 3 年間の成長 徳島大学 理工学部 3 年 小若 駿斗 P⑫ 徳島大学ロケットプロジェクトのあゆみ 徳島大学 理工学部 4 年 鳩野 快 他 P⑬ 徳島大学避難所開設キットへの配慮項目とその効果について 徳島大学 理工学部 4 年 麻生 大勝 他		

研究発表Ⅱ (口頭発表)		
14 : 15 ~ 15 : 35	口頭発表 D < 4 - 202 講義室 > D① 14 : 15 ~ 14 : 35 ■探究学習マイプロジェクトを通じた地域共創型授業の取り組み 神山まるごと高専 佐野 淳也 他	
	口頭発表 E < 4 - 203 講義室 > E① 14 : 15 ~ 14 : 35 ■高校生イノベーション選手権 in 徳島 徳島大学 総合科学部 2年 石井 千 他	
	D② 14 : 35 ~ 14 : 55 ■神山まるごと高専と企業の協働による実践的学びの考察 四国大学 濱上 隆道 他	E② 14 : 35 ~ 14 : 55 ■徳島大学 i. School を通じてみるアイデア創出の因子 徳島大学 医学研究科 3年 谷口 諭 他
	D③ 14 : 55 ~ 15 : 15 ■AI Technology in Communicative English Classes 生成 AI の使用実態と意識に関する調査 徳島大学 教養教育院 藤滝 香織	E③ 14 : 55 ~ 15 : 15 ■コンソーシアムとくしま「成長支援型インターンシップ」におけるサポート学生スタッフの学びと成長について 徳島大学 生物資源産業学部 4年 西田 大連 他
15 : 50 ~ 17 : 50	D④ 15 : 15 ~ 15 : 35 ■教養科目の学部混合グループワークとプレゼンテーション 徳島大学 教養教育院 南川 慶二	E④ 15 : 15 ~ 15 : 35 ■大学生のアイデンティティ形成と他者の影響 高知大学大学院 総合人間自然科学研究科地域協働学専攻 西上 一成 他
18 : 20 ~	特別講演 < 4 - 202 講義室 > 演題 : 「SA・TA と共に授業経験を作るとは」 講師 : 佐藤 万知 (京都大学大学院 教育学研究科 准教授) ディスカッション テーマ : 「講演に対する質問や授業実践に関連する疑問など」 指定討論者 : 上月 翔太 (愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室 講師) コメンテーター : 佐藤 万知 (京都大学大学院 教育学研究科 准教授) 南川 慶二 (徳島大学 FD 委員会委員長, 教養教育院 教授)	
情報交換会 < 徳島大学 常三島キャンパス 生協食堂 Kirara >		

